

キルギス語の数詞 *bir* 「1」 の多機能性 *

アクマタリエワ ジャクシルク

(日本学術振興会特別研究員／新潟大学)

【要旨】本発表はキルギス語の数詞 *bir* 「1」 の多様な用法について論じるものである。従来の概説的な研究とは異なり、キルギス語の2つの文学作品から抽出した、数詞の *bir* 「1」 を含む実際の用例（全5190例）を細かく検証して、*bir* 「1」 の多機能性を提示する。具体的には、*bir* の意味的な多機能性を示すものとして、名詞を修飾する場合に、物の数を表すだけでなく、少量性、不定・不確定性、同一性、唯一性を表すこと、および動詞を修飾する場合に、動作の一回性、共同性、動作の素早さを表すなどのような様々な用法を持つことを示す。また統語論・形態論的な面から、*bir* がとりたて助詞、疑問詞、否定辞、複数接尾辞などと共に現れる場合に見られる多機能性について指摘する。

0. はじめに

数詞 *bir* 「1」 は、他の数詞と比べ、その用法において非常に特殊な位置を占めており、まず数の初めであること、次に複数でないことから、*bir* 「1」 ならではの様々な用法が豊富である。これはキルギス語だけではなく、多くのチュルク諸語に共通することである(Baskakov 1975)。

なお、日本語の「1」には、「いち」という漢語読みと、「ひと」という和語の読み方はあるが、キルギス語の「1」は *bir* しかない。

1. 先行研究／問題提起

bir という単語はキルギス語のみではなく、多くのチュルク諸語で同源語が用いられている。Tenišev (1978: 109-111) によると、アゼルバイジャン語、トルクメン語、トルコ語、ガガウズ語、クムク語、カラチャイ・バルカル語、クリミア・タタール語、カライルム語、ノガイ語、カラカルパク語、ウズベク語、トゥバ語、キルギス語、アルタイ語、古代チュルク語では *bir*、タタール語、バシキル語では *ber*、カザフ語では *bir*、シオル語、チュリム・チュルク語、サラル語では *pir*、西部ユグル語では *pir*、*pur*、サハ語では *biir*、チュワシ語では *perre*、*per* である。

Yudahin (1965) や Akmataliev (2011) などのキルギス語辞典においても *bir* がもつ多様な意味・用法が記載されている。また従来の数詞研究を見てみると、Toksonaliev (2010) はロシア語とキルギス語の数詞について対照研究を行い、Degirmenji (2018) ではトルコ語とキルギス語の数詞 *bir* のことわざや慣用的な表現について考察が述べられている。

これらの先行研究と本発表を比べると、先行研究の大部分は数詞の全体的な解釈であり、個別のデータに基づく細かい検証がされていない点が指摘できる。本調査では数詞の *bir* 「1」 を含む用例のみ扱い、それらを実際に使用されている文から収集し、*bir* の持つ多機能性という特徴を明らかにしていきたい。一つ例を挙げると、次の例では、*bir* 「1」 は文中での位置によって意味が異なる。

* 本研究は科研費(研究課題 21J40129, 21H04346)による成果の一部である。また本発表にあたって大崎紀子氏及び江畑冬生氏に有益なコメントをいただいた。ここにしてお礼を申し上げる。

(1) *al meni bir kara-di* 「彼は私を一回見た。」

彼 私:ACC 一 見る-PST.3²

(2) *al bir meni kara-di* 「彼は私だけを見た。」

彼 一 私:ACC 見る-PST.3

(1)では、動作の回数を表すのに対して、(2)では「私だけ」という動作の対象を限定する意味で使われている。このような多様な *bir* の使われ方を丁寧に観察することにより、その多機能性を記述できるのではないかと考える。

2. 調査方法

本調査では、キルギス語の2つの文学作品 (Kasimbekov (1998)、Elebaev (1984)) から数詞 *bir* の用例を集めた。全部で 5190 例を抽出³し、このデータをもとに *bir* の意味用法を分析した。また補助的に Yudahin (1965)、インターネット検索 (2022.07.01~2022.08.31) により調査の不足を補った。

3. 考察

ここでは、今回のデータから抽出した例文を [bir 名詞] と [bir 動詞] に分け考察する。

3.1. [bir 名詞]⁴

日本語では事物を数える際に、「1枚」、「1冊」、「1匹」のように、「枚」、「冊」、「匹」のような様々な助数詞を用い、助数詞だけの辞典があるほど豊富である。キルギス語にはこのような「助数詞」という概念はなく、「数詞+名詞」という形で成り立つ。基本的に複数あるうちの「一つ」を限定する場合に用いられる。しかし、文中においては *bir* が表す意味が多義にわたる。

① 物の数を表す

bir は後続する名詞が表す具体的な物や生き物の数を表す ((3), (4))。また、それ自体が名詞として働き格接尾辞が付くこともある ((5))。

(3) *ǰay-ı-nda bir som ber-se, küz-ü-ndö bir koy kil-ıp al-a-t.*

夏-POSS.3-LOC 一 ソム 与える-COND.3 秋-POSS.3-LOC 一 羊 する-CVB 取る-PRES-3

「夏に一ソムを与えたら、(彼は) 秋には (その一ソムを) 一匹の羊にする」

(4) *anin bir emes, eki bala-si bar* 「彼は一人ではなく、二人の子供がいる。」

彼:GEN 一 NEG 二 子-POSS.3 ある

(5) *ǰelbire-t-ıp bir-di say-ıp ket-ken* 「(旗を) はためかせて、一個を刺していった。」

はためく-CAUS-CVB 一-ACC 刺す-CVB 行く-PST.3

また、次のように抽象的な物の数を表すこともできる。

² 略号: ABL 奪格/ACC 対格/AUX 補助動詞/CVB 副動詞形/CAUS 使役/COND 条件/COP コピュラ/DAT 与格/GEN 属格/IMP 命令/NEG 否定/POSS 所有/PRES 現在/PSN 人名/PLN 地名/PST 過去/PTCP 形動詞/RECIP 相互/VOL 意志/3 三人称

³ *bir* から派生した動詞や名詞は除いている(例: *birik*-「一つになる」、*birinde*-「バラバラになる」、など。)

⁴ *bir* に「時」を表す語が後続して現れる形式(例: *bir ay*「一月」、*bir ün*「一夜」、*bir juma*「一週」、*bir apta*「一週」、等)が多数出現する。また、序数詞、集合数詞(例: *biröö*「一人」、*birinči*「初めに」、*birdey*「同じような」、*birdeme*「何か」、*bir-eki*「1-2」、*birin-ekin*「一つ二つ」)なども出現頻度が多い。本発表では特に触れないこととする。

- (6) *akiri joo-go jaram-i naçarla-dī— bul bir sebep*「最終的に軍事力が悪化した。これは一因だ。」
最終的 戦い-DAT 能力-POSS.3 悪化する-PST これ 一 原因

② 極めて少量であることを強調する

次の(7) *bir ooz*「一口」、(8) *bir tamči*「一滴」は物の数というよりも、物の量を指している。ここでは具体性を失い、量が極めて少ないことを強調している。

- (7) *bir ooz söz-üm bar ele de-y-t*「一言、言いたいことがあると言う。」
一 口 語-POSS.1SG ある AUX 言う-PRES-3

- (8) *jol-du kata isik-ta bir tamči suu kör-gön-übüz jok*
道-ACC 中 熱-LOC 一 滴 水 見る-PTCP-POSS.1PL 無
「移動中の熱い時、一滴も水を見たことがなかった。」

③ 唯一であることを強調する

次の(9)では、先述した物の数や少量の意味ではなく、唯一であることを強調する。ここで「神」がたくさんいるわけでもなく、「神」の量を表しているものでもない。ここでは「唯一の神の意志」のように「神一人」ということを強調している。

- (9) *Ar kanday iş bir kuday-din erk-i menen.*「どんな仕事も唯一の神の意志によるものだ。」
色々な 仕事 一 神-GEN 意志-POSS.3 よる

- (10) *Meni karma-p ber-işiz, bir men öl-öyün!*「私を捕まえてやってください。私だけ死のう！」
私:ACC 捕まえる-CVB AUX-IMP.2SG 一 私 死ぬ-VOL.1SG

(9)の *bir kuday*「唯一の神」、(10) *bir men*「ただ私(だけ)」のように、そもそも唯一の存在を指す場合にのみ使用できる。これらを **kuday bir*「神だけ」、**men bir*「私だけ」のように名詞と *bir* の位置を置き換えることはできない。なお、例えば *bul maseleni bir Asan çeçet*「この問題は唯一アサンが解決する」のように固有名詞にも使用できる。つまり、唯一であることを強調する場合、固有名詞や人称代名詞に限られる。

④ 身体部位の語と共起⁵

今回の調査では、*bir* が身体部位に用いられる例が数多く出現した。特に対になっている身体部位の場合、片方を言う時に使用されている。例えば、*bir köz*「片方の目」、*bir but*「片方の足」、*bir kol*「片方の手」、*bir koltuk*「片方の脇」、*bir alakan*「片方の手のひら」などである。

したがって、元々一個しか無い物に関しては、**bir murun*「一つの鼻」、**bir kindik*「一つのへそ」のような例は出現しなかった。

但し、*bir ooz*は「一つの口」の場合、文脈によって意味が異なる場合がある。少量の意味を表す場合(7)と、「同一」としてとらえる場合(cf. 3.1.の⑥)が見られる。

- (11) *Biy-ler bir ooz-don kubatta-ş-ti.*「指導者たちは、一同に賛同した。」
指導者-PL 一 口-ABL 賛同する-RECIP-PST.3

⁵ 他に、*bir boor*「一つの肝臓」という身体部位を表す用例はあったが、「兄弟、親戚」という固定した表現として使用される。
例: *Esil kayran bir boorum!*「さようなら永遠に私の兄弟よ！」

⑤ 不定・不確定な意味を表す

bir は主に時、場所、人、物事などを修飾する時、はっきりと限定することを避け、漠然と示す場合に用いられる。例えば、「ある人」、「ある日」などのように使用できる。

(12) *Bayke, bir kiši mamī-dagī at-tī čeč-ip jat-a-t.* 「おじさん、ある人が杭にいる馬をほどいているよ。」

兄 一 人 杭-にある 馬-ACC 解く-CVB AUX-PRES-3

(13) *Bir kün-ü komuz-u-n sura-dī.* 「ある日、コムズ（楽器名）を求めた。」

一 日-POSS.3 コムズ-POSS.3-ACC 求める-PST.3

但し、次のように所有接尾辞が付かない場合、「一日」と数を指す。

(14) *Men bir kün jumuš kil-ip ber-eyin.* 「私が一日、仕事をしてあげる。」

私 一 日 仕事 する-CVB 与える-VOL.1SG

⑥ 「同一」のまとまりとしてとらえる

ここであげる *bir* は、ある物事が同じであること、一つのものであることを表す。この場合、(16) のように *bir* が名詞述語となって人称接尾辞が付加することもある。

(15) *baardigī bir dobuš-tan kol kötör-dü* 「みんなが一同に手を挙げた。」

皆 一 声-ABL 手 挙げる-PST.3

(16) *Biz bir-biz.* 「私たちは一つだ（一緒だ）。」

私達 一-1PL

⑦ とりたて助詞との共起

bir はとりたて助詞 *gana* 「だけ」、*ele* 「だけ」、*da* 「も」、*dagī* 「も」と共起して現れる場合がある。(17) のように肯定文の場合、「一つだけ」と限定の意味を表すが、(18) のように否定述語の場合、反対に全部を否定する意味になる。

(17) *Kirgiz-Say-din orto-su-nda bir gana kištak bar.* 「クルグズ・サイの真ん中には一つだけ村がある。」

PLN-GEN 真ん中-POSS.3-LOC 一 だけ 村 ある

(18) *Kiz-din bir da sepkil-i jok.* 「女性の一つもシミがない。」

女-GEN 一 も シミ-POSS.3 無い

⑧ 疑問詞との共起

今回のデータから *bir* は疑問詞と共起して出現する頻度が圧倒的に多い。*bir* と疑問詞の組み合わせをみると、*bir* が (i) 疑問詞の前に来る場合と (ii) 疑問詞の後に来る場合がある。

(i) *bir* が *neče* 「いくつ」、*kanča* 「いくつ」、*neme* 「何」といった疑問詞の前に現れる。例えば、*bir neme* 「何か」、*bir nerse* 「何か」、*bir neče* 「いくらも」、*bir kanča* 「いくつも」などである。

(ii) *bir* が *kaysi* 「どれ」、*kay* 「どれ」、*kanday* 「どんな」といった疑問詞の場合、後ろに後続して現れる。例えば、*kaysi bir* 「どれか」、*kay bir* 「どれか」、*kanday bir* 「どんなか」、*kandaydir bir* 「どんなか」、*kandaydir bir jak* 「どこかへ」などが挙げられる。

但し、*bir* は *kim* 「だれ」、*emne* 「何」、*kayda* 「どこ」といった疑問詞とは共起できない。

江畑・Akmatalieva (2022: 31-32) によれば、*bir* と疑問詞の組み合わせはチュルク諸語の中で同じよう

に現れるわけではないという。例えば、サハ語では数詞の *bir* は疑問詞と共に全く用いられない。一方、トゥバ語とキルギス語では *bir* が頻繁に使われている。但し、トゥバ語の場合、「1」を表す数詞 *bir* を接語的に用いるものが多い（例: *kim=bir (kiži)* 「だれか」、*kažan=bir* 「いつか」など）。一方のキルギス語では *bir* と普通名詞の組み合わせによるもの（例: *bir nerse* 「いつか」、*bir kezde* 「いつか」など）が多い。この2言語においては *bir* の位置が逆転している。

また、語彙や文法面でキルギス語と共通点が多いアルタイ語の場合、*bir* が使われる疑問詞は一個しかない。つまり、チュルク諸語のこれらの4つの言語を見ただけでも、*bir* という語の一つの使い方が一様ではないことが分かる。チュルク諸語におけるこのような現象の広がりや調査することが今後の課題となる。

⑨ 複数接尾辞の付加

キルギス語の場合、数詞を伴う名詞には基本的に複数接尾辞が付かない。例えば、*eki koy* 「2つの羊（2匹の羊）」の場合、*eki* 「2」という数を表す数詞が付いているため、*-LAr* 接尾辞は付かない。つまり、**eki koy-lor* 「2匹の羊たち」とは言わない。こう考えると、当然 *bir* 「1」にも複数接尾辞が付かないと思うのが当然である。しかし、今回の調査から *bir* 「1」にも複数接尾辞の *-LAr* がつく例文がある。例えば、次の文では *bir-ler-i* 「ある人たちは」という不特定複数の意味を表す（cf. 3.1.の⑤）。

(19) *bir-ler-i našaa čeg-ıp, kiz-ıp al-a-t.* 「ある人達は麻薬を吸って、酔ってしまう。」

一-PL-POSS.3 麻薬 吸う-CVB 酔う-CVB 取る-PRES-3

また次のように「およそ、だいたい」の意味（概数）を表すことがある。この場合、数詞に複数接尾辞 *-LAr* が付加した上に位格（与格も可能）が続くことになる。江畑・Akmatalieva (2022: 35) によると、サハ語やトゥバ語には同様な用法が見られない。なお、*bir* だけではなく、他の数詞にも同様の表現が成り立つ。

(20) *tüinkü saat bir-ler-de ukta-dı-m* 「夜の1時ごろに寝た。」

夜の 時 一-PL-LOC 寝る-PST-1SG

3.2. [bir 動詞]

動詞を直接 *bir* が修飾する場合にも意味が多義にわたる。今回、いくつのタイプに分けて、まとめることを試みる。

① 一回的動作を表す場合

まず、*bir* 「1」は (21) のように動作の回数を表す。但し、(22) では「私だけ」のように修飾する語を限定する意味を表す。*bir* はすべての文において (21)、(22) のように語順を変えても（意味は異なるが）成立するわけではない。(22) のような限定の意味は代名詞か、固有名詞に限られる（cf. 3.1.の③）。

(21) *al meni bir kara-dı* 「彼は私を一回見た。」 ((1)の再掲)

彼 私:ACC 一 見る-PST.3

(22) *al bir meni kara-dı* 「彼は私だけを見た。」 ((2)の再掲)

彼 一 私:ACC 見る-PST.3

次の文では *bir* は一回的動作を表すが、それと同時に「一つ」だけという話し手の強い依頼にもとれる。

(23) *Kulake, bir sura-r-ım, uşu-nu atkar.* 「クラケ、一つ頼みたい、これをやってくれ。」

PSN 一 求める-AOR-1SG これ-ACC やる.IMP.2SG

なお、**bir** は次のように否定の動詞句に現れる場合、全部を否定する意味になる (cf. 3.1.の⑦)。

- (24) **bir** *kon-bo-y* *ket-ken-im-e* *ič-im* *küy-tip* *kal-di*
一 泊まる-NEG-CVB 行く-PTCP-POSS.1SG-DAT 腹-POSS.1SG 燃える-CVB AUX-PST.3
「一回も泊まらないで戻って悔しくてたまらない。」

② 共同動作を表す場合

これらの意味においては、**bir** は「同じ」、「一緒に」という意味が強い。3.1.の⑥で示した **bir** の意味と同様である。但し、動詞述語文の例を見ると、共同動作が現れる動詞の場合に限って「一緒に、共に」という意味が生じる。

bol-「なる」、*jaša-*「暮らす」、*jat-*「一緒にいる」、*oku-*「勉強する」、*ište-*「働く」、*ket-*「行く」、等

- (25) **biz** *altı* *jetim* **bir** *jat-a-biz* 「私たち六人の孤児は一緒に (共に) 寝ます。」
私達 六 孤児 一 寝る-PRES-1PL
- (26) **bir** *ket-ken* *eken-biz* 「私たちは一緒に (共に) 帰ったようだ。」
一 行く-PTCP MOD-1PL

③ 動作の素早さを表す場合

これらの例の場合、**bir** は一回の動作を強調すると同時に、その動作が素早く行われる意味を表す。例えば、次の例の場合、単に一回叩いたのではなく、一回強く、素早く叩いたという意味になる。

- (27) *at-ti* *kamči* *menen* **bir** *sal-di*
馬-ACC 鞭 で 一 叩く-PST.3
「馬を鞭で一回 (素早く) 叩いた。」
- (28) *alakan-ı* *menen* *jaak-ka* **bir** *tart-ti*
手のひら-POSS.3 で 顔-DAT 一 引っぱたく-PST.3
「手のひらで顔面に一回 (素早く) 引っぱたいた。」

本調査で「素早さ」の意味が現れる例文を見てみると、修飾される動詞は、人間が他の人や物を「打つ」「叩く」という動作を表す打撃動詞に限る。動作主が無生物の例はほとんどない。

čap-「叩く」、*sal-*「打つ」、*saba-*「叩きつける」、*šilte-*「殴る」、*tiy-*「触れる (軽く叩く)」、*mušta-*「拳骨を食わせる」、*urun-*「ぶつかる」、*silki-*「振る (揺らす)」、等。

④ 「初」を表す場合

ここでは **bir** は一回という意味よりも、「初めて」という意味を表している。特に、*bil-*「知る」、*sez-*「感じる」などの認識動詞の場合に限る。

- (29) *Taň* *at-kan-ı-n* *oşondo* *gana* **bir** *bil-di-k.*
朝 明ける-PTCP-POSS.3-ACC その時 だけ 一 知る-PST-1PL
「夜が明けることをその時、初めて知った。」
- (30) *Tigi-ler* *bul* *joruk-tu* *kel-gen-den* *kiyin* *gana* **bir** *bil-iš-e-t.*
あれ-PL これ 事-ACC 来る-PTCP-ABL 後 だけ 一 知る-RECIP-PRES-3

「彼らはこの出来事について、来てから、初めて分かる。」

⑤ 望ましくない事態の予想を表す場合

bir に好ましくない動作や事態を表す動詞が後続する場合、その行為の数を表すのではなく、その行為が「絶対に～起こるだろう」という強い意味をもたらす。基本的に未来形文に限る。

(31) *azab-ï-n bir tart-a-t ko* 「彼(女)は一回(絶対に)苦勞するでしょう。」

苦勞-POSS.3-ACC 一 引く-PRES-3 MOD

(32) *bir-dï kör-ö-t* 「彼(女)は一回(絶対に)ひどい目に合うでしょう。」

一-ACC 見る-PRES-3

⑥ *bir* が仮定条件文に現れる場合

仮定条件文に *bir* が登場する場合、基本的に特定の仮定-帰結の関係を表す。まだ起きていない行為 A の成立が原因やきっかけになって、行為 B が起きることを表す。

(33) *Bir ber-se-m, oşondo ber-e-m.* 「一回あげるとしたら、その時にあげる。」

一 与える-COND-1SG その時 与える-PRES-1SG

(34) *Bir ukta-sa, tur-ba-y-t.* 「一度寝たら、起きない。」

一 寝る-COND 立つ-NEG-PRES-3

まとめ

本発表ではキルギス語において、ものの数を表す *bir* の多機能性について述べた。本発表で取り上げた *bir* 「1」の例や表現は決して新しい用法ではなく、いずれも自然な会話で出ている、従来から用いられてきた表現ばかりである。本発表では *bir* 「1」の実例を元に考察し、改めて多機能性をもつことを確認した。将来的にはキルギス語の *bir* 「1」の多機能性が他のチュルク諸語においてどう機能しているのかという点を明らかにするための基本資料になると希望している。

参考文献

- Akmataliyev, Abdylđazan. (2011) *Kirgiz Tilinin Sözdüğü*. Bişkek: Avrasya Press.
- Baskakov, Nikolay Aleksandrovič. (1975) *Istoriko-tipologičeskaya harakteristika strukturi tyurkskih yazikov*. Moskva: Nauka.
- Degirmenji, Tugrul. (2018) Türk jana kirgiz tilderindegi bir san atoočunun etnomadaniyattik simbolikası. *BGU jarčısı* №2(44). K. Karasaev atındağı Bişkek Gumanitardik Universitetinin ilimiy žurnalı.
- Nadelyaev, Vladimir Mihaylovič. (eds.). (1969) *Drevnetyurkskiy slovar'*. Leningrad: Nauka.
- Kudaybergenov, Sarıbay. (1987) Glagol, In: Zaxarova, O. V. (eds.), *Grammatika kirgizskogo literaturnogo yazikal: Fonetika i morfologiya*. pp. 207-302. Frunze: Ilim.
- Tenišev, Edhyam Rahimovič. (1978) Tyurkskie <<odin>> <<dva>> <<tri>>, In Kononov, A. A. (ed.), *Tyurkologičeskij sbornik 1974*, pp. 109-113. Moskva: Nauka.
- Toksonaliev, Roza Musurapšaevna. (2010) *Viraženie količestvennih otnošenij v kirgizskom – russkom yazikah*. Bişkek, Insanat.
- Yudahin, Konstantin Kuz'mič. (1965) *Kirgizsko-Russkiy slovar'*. Moskva: Izdatel'stvo Sovetskaya enciklopediya.
- 江畑冬生・Akmatalieva Jakshylyk. (2022) 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』、新潟大学・人文学部アジア連携研究センター。

用例出典

- Kasimbekov, Tölögön. (1998(1966)) *Singan kilič* [折れた剣]. Kirgizstan.
- Elebaev, Mukay. (1984) *Uzak žol* [遠路]. Frunze, Mektep.